

中

(一)

大

里

甲源一刀流の巻

菩

介

薩

山

峠

時代小説文庫

時代小説文庫 1

大菩薩峠 (一) 甲源一刀流の巻 全二十冊

昭和五十六年七月二十日 初版発行

昭和五十六年九月二十日 再版発行

著 者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一十二一十四

電話東京二六一一五三七五(代表)

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 暁印刷 製本所 大谷製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600101-7400(0)



時代小説文庫

1



富士見書房

大菩薩峠

(一)

甲源一刀流の巻 中里介山

目次

甲源一刀流の巻

七

鈴鹿山の巻

三〇

壬生と島原の巻

三四

三輪の神杉の巻

三六

中里介山の世界

尾崎秀樹
四八

大菩薩峠

(一)

甲源一刀流の巻

この小説「大菩薩峠」全篇の主意とする処は、人間界の諸相を曲尽きよくじんして、大乘遊戯だいじょうぎの境に参入するカルマ曼陀羅だらの面影を大凡下だいぼんげの筆にうつし見んとするにあり。

この着想前古に無きものなれば、その画面絶後の輪郭を要することは是非無かるべきなり。読者、一染いっせんの好憎に執し給うこと勿なれ。至嘱ししよく。

著者謹言

甲源一刀流の巻

—

大菩薩峠は江戸を西に距る三十里、甲州裏街道が甲斐の国東山梨郡萩原村に入つて、その最も高く最も険しきところ、上下八里にまたがる難所がそれです。

標高六千四百尺、昔、貴き聖が、この嶺の頂きに立って、東に落つる水も清かれ、西に落つる水も清かれと祈つて、菩薩の像を埋めておいた、それから東に落つる水は多摩川となり、西に流るるは笛吹川となり、いずれも流れの末永く人を湿おし田を実らすと申し伝えられてあります。

江戸を出て、武州八王子の宿から小仏、笹子の険を越えて甲府へ出る、それがいわゆる甲州街道で、一方に新宿の追分を右にとつて往くこと十三里、武州青梅の宿へ出て、それから山の中を甲斐の石和へ出る、これがいわゆる甲州裏街道、(一名は青梅街道)であります。

青梅から十六里、その甲州裏街道第一の難所たる大菩薩峠は、記録によれば、古代に日本武尊、中世に日蓮上人の遊跡があり、下つて慶応の頃、海老蔵、小団次などの役者が甲府へ乗り込むとき、本街道の郡内あたりは人氣が悪く、ゆすられることを怖れてワザワザこの峠へ廻つたと

いうことです。人氣の險悪は山道の險悪よりなお悪いと見える。それで人の上り煩う所は春もまた上り煩うと見え、峠の上は今新緑しんりよくの中に桜の花が真つ盛りです。

「上野原うえの はらへ、盗人が入りましたそうですが」

「へエ、上野原へ盗人が……」

「それがはや、お陣屋へ入ったというですがすから驚くがす」

「驚いたなあ、お陣屋へ盗賊が……どうしてまあ、この頃のように盗賊がはやることやら」

妙見みょうけんの社の縁に腰をかけて話し込んでゐるのは老人と若い男です、この兩人は別に怪しいものではない、このあたりの山里に住んで、木も伐きれば焼畑も作るという人たちであります。

これらの人は、この妙見の社を市場いちばとして一種の奇妙なる物々交換を行う。

萩原はぎわらから米を持って来て、妙見の社の前へ置いて帰ると、数日を経て小菅こすげから炭を持って来て、そこに置き、さきに置いてあつた萩原の米を持って帰る。萩原は甲斐を代表し、小菅は武蔵を代表する。小菅が海を代表して魚塩ぎょえんを運ぶことがあつても、萩原はいつでも山のものです。もしもそれらの荷物を置きばなしにして冬を越すことがあつてもなくなる氣づかいはない——大菩薩峠は甲斐と武蔵の事実上の国境であります。

右の兩人は、この近まわりに盗賊のはやることを話し合っていたが結局、

「どろぼうが怖いのは、物持ちの衆のことよ、こちとらが家はどろぼうのほうで怖れて逃げるわ」

ということに落ちて、笑つて立とうとするときに、峠の道の武州路ぶしゅうろの方から青葉の茂みをわけ

て登り来る人影があります。

「あ、人が来る、お武家様みたようだ」

二人は少しあわて気味で、炭俵や糸革袋が結びつけられた脊負梯子へ両手を突っ込んで今登り来るといふ武家の眼をのがれるもののように、社の裏路を黄金沢の方へ切れてしまいます。

二

ほどなく武州路の方からここへ登って来たのは彼ら兩人が認めたとおり、一個の武士でありました。黒の着流しで、定紋は放れ駒、博多の帯を締めて、朱微塵、海老鞆の刀脇差をさし、羽織はつけず、脚絆草鞋もつけず、この険しい道を、素足に下駄ばきでサッサッと登りつめて、今頂上の見晴らしのよいところへ来て、深い編笠をかたげて、甲州路の方を見廻しました。

歳は三十の前後、細面で色は白く、身は痩せているが骨格は冴えています。この若い武士が峠の上に立つと、ゴーツと、青嵐が崩れる。谷から峰へ吹き上げるうら葉が、海の浪がしらを見るようにさわ立つ。そこへ何か知らん、寄せ来る波で岸へ打ち上げられたように飛び出して来た小動物があります。

妙見の社の上にかぶさった栗の大木の上に固まって、武士の方を見つめては時々白い歯をむいてキャッキャッと啼く、その数、十匹ほど、ここの名物の猿であります。

柳沢峠が開けてから後の大菩薩峠というものは、全く廃道同様になっしまいましたけれど、今日でも通れば通れないことはないのです。そこを通過して猿に出くわすことは珍しいことではな

いが、それを珍しがって悪戯いたづらでも仕かけようものなら、かえってとんだ仕返しを食うことがあります。

人の弱身を見るに上手なこの群集動物は、相手を見くびると脅迫する、敵かなわないときは味方を呼ぶ、味方はこの山々谷々から呼応して来るのですから、初めて通る人は全くオドかされてしまいます。が旅に慣れた人は、その虚勢を知って自らそれに処するの道があるのであります。

右の武士は、慣れた人と見えて、一眼猿を睨にらみつけると、猿は怖れをなして、なお高い所から、しきりに擬勢ぎせいを示すのを、取り合わず峠の前後を見廻して人待ち顔です。

さりとて容易に人の来るべき路ではないのに、誰を待つのであろう、こうして小半時もたつと、木の葉の繁みを洩もれて、かすかに人の声がします。その声を聞きつけると、武士はズカズカと萩原街道の方へ進んで、松の木立から身を斜めにして見おろすと、羊腸ようちようたる坂路のうねりを、今しも登って来る人影は、たしかに巡礼の二人づれであります。

「お爺さん——」

よく澄んだ子供の声がします、見れば一人は年寄りで半町ほど先に、それと後れて十二三ぐらいの女の子——今「お爺さん」と呼んだのは、この女の子の声でありました。

右の二人づれの巡礼の姿を認めると、何と思うてか武士は、つと妙見堂のうしろに身をかくします。

木の上では従前じゅうぜんの猿が眼を円くする。

「やれやれ頂上へ着いたわい、おお、ここにお堂がござる」

年寄りのほうの巡礼は社の前へ進んで笠の紐を解いてかしこまると、

「お爺さん、ここが頂上かい」

面立ちの愛らしい、元氣もなかなかよい子でありました。

「これから下り一方で、日の暮れまでに河内泊りは楽なものだ。それから三日目の今頃は三年ぶりでお江戸の土が踏める——さあお弁当をたべましょう」

老爺は行李を開いて竹の皮包みを取り出すと、女の子は、

「お爺さん、その瓢箪をお貸しなさい、さっきこの下で水音がしましたから、それを汲んでまいりましょう」

「おおそうだ、途中で飲んでしまったげな、お爺さんが汲んで来ましょう、お前はここで休んでおいで」

腰なる瓢箪を抜き取ると、

「いいのよ、お爺さん、あたしが汲んで来るから」

女の子は、老人の手から瓢箪を取って、ついこの下の沢に流るる清水を汲もうとて山路をかけ下ります。

老人は空しくそのあとを見送って、ぼんやりしていると、不意に背後から人の足音が起ります。

「老爺」

それは最前の武士でありました。

「はい」

老爺は、あわただしく居ずまいを直して挨拶あいさつをしようとするとき、かの武士は前後を見廻して、
「ここへ出ろ」

編笠も取らず、用事をも言わず、小手招きするので、巡礼の老爺は怖る怖る、

「はい、何ぞ御用でござりまするか」

小腰をかがめて進みよると、

「彼方あつちへ向け」

この声もろともに、パッと血煙が立つと見れば、何という無残なことでしょう、あっという間もなく、胴体全く二つになって青草の上にのめってしまいました。

三

「老爺さん、水を汲んで来てよ」

瓢箪を捧げた少女は、いそいそとかけて来たが、老人の姿の見えぬのを少しばかり不思議がつて、

「老爺さんは何処どこへ行ったろう」

お堂の裏のほうへでも行ったのかしらと、来て見ると、

「あれ——」

瓢きうべを投げ出してすがりついたのは老人の亡骸なきがらでした。

「老爺さん、誰に殺されたの——」

亡骸をかき抱いて泣きくずれます。

ここにこの不慮の椿事を平気で高みの見物をしていたものがあります。最前の武士の一挙一動から、老人の切られて少女の泣き叫ぶ有様を目も放さずながめていたのは、かの栗の木の上の猿です。

猿どもは、今や木の上からゾロゾロと下りて来ました。

老少二人の伏し倒れた周囲を遠くから取りまいてだんだんに近寄ると、小さなやつが、いきなり飛び出して、少女の頭髮にさしてあった小さな簪をちよつとツマんで引き抜き、したり面に仲間のものに見せびらかすような身振りをする。それを見た、も一つの小猿は負けない気で、少女の頭髮から櫛を抜き取って振りかざす。その間に大猿どもは、さきに老爺が開きかけた竹の皮包みの握り飯を引き出して口々に頬ばってしまふと、今度は落ち散っていた手頃の木の枝を拾って、何をするかと思えば、刀を差すような風に腰のところへ当てがい、少女の背後へ廻って抜打ちに——つまり最前の武士のやったとおりに——その木の枝で少女の脊中をなぐりつけました。

我を忘れて泣き伏していた少女は、この不意の一撃で、

「あれ——」と飛びのいたが、気丈な子でした。すぐにあり合はす木の枝を拾い取って振り上げると、猿どもは眼をむき出し白い歯を突き出してキャッキャッと叫びながら、少女に飛びかかろうとして、物凄い光景になりましたが、折よくそこへ通りかかった旅の人があります。

年配は四十ぐらいで、菅笠をかぶって堅縞の風合羽を着、道中差しを一本さしておりましたが、手に持っていた松明の火を振り廻すと、今まで驕っていた猿どもが、急に飛び散らかつて、我勝

ちに元の栗の大木へと馳せ上ります。

旅に慣れた証拠は、この旅人の持っている松明でわかります。大菩薩を通るものは獸類を逐うべく、松の木のヒデというところでこしらえた松明を用意します。獸類の中でも猿は殊に火を怖れるものであります。右の旅人はその松明を消しもせず、

「姉さん、怪我はなかったかね」

近く寄って見て、

「おやおや、人が斬られている！」

少女を掻き分け屍骸へ手をかけ、その斬り口を検べてみて、

「よく斬ったなあ、これだけの腕前を持つてゐる奴がまた何だつてこんな年寄りを手にかけてるう」

旅人は歎息して何をかしばらく思案していたが、やがて少女を慰め励まして、ハキハキと老爺の屍骸を押し片づけ、少女を自分の脊に負うて、七つ下りの日を後ろにし、大菩薩峠をずんずんと武州路の方へ下りて行きます。

四

大菩薩峠を下りて東へ十二三里、武州の御嶽山と、多摩川を隔てて向き合ったところに、柚のよく実る沢井という村があります。この村へ入ると誰の眼にもつくのは、山を負うて、冠木門の左右に、長蛇の如く走る白壁に黒い腰をつけた塀と、それを越した入母屋風の太屋根であつて、

これが机龍之助つくもりのすけの邸宅であります。

机の家は相馬の系統を引き、名に聞えた家柄であるが、それよりも今世間せけんに知られているのは、門を入ると左手に、九歩はと五歩はとに建てられた道場であります。いつでもこの道場に武者修業の五人や十人ゴロゴロしていないことはないものでありますが、今日はまた話がやかましい。

「お聞きなされましたか、昨日とやら大菩薩に辻斬りつじざりがあつたそうにござります」

「ナニ大菩薩に辻斬りが……」

「年老とつた巡礼が一人、生胴いきどうを物の見事にやられたと甲州から来た人のもっぱら噂うわさでござりまする」

「やれやれ年寄りの巡礼が、無残なことじゃ」

「近頃の盗人沙汰ぬすびとさたと言ひ、またしても辻斬り、物騒千万なことでございますな」

「さよう、何しろこの街道筋は申すに及ばず、秩父熊谷から上州野州へかけて毎日のように盗人沙汰、それでやり口が皆同じようなやり口ということでございます」

「いかにも、それほどの盗賊に罪人は一人もあがらぬとは八州の腹切りものだ」

「それにしても、この沢井村さわいむら界限かいげんに限って、盗賊もなければ辻斬りもない、これというも、つまり沢井道場の余徳でありますな」

沢井道場で門弟食客連が、こんな噂をしているのは、前段大菩薩峠の殺人の翌々日のことでありました。

「さて道具無し的一本」